

中村八幡神社 日暮通2丁目



旧中村の氏神で、祭神は応神天皇。縁起は定かではないが、言い伝えによれば、昔、筒井村と脇浜村の住人が対立していたとき、生田の里から両村の中間に移り住んだ長老が石清水八幡宮より勧請し、中の八幡宮と呼んだのが始まりと伝える。明治の中頃、一時二宮神社に合祀されたが、1932(昭和7)年に再び氏子の手でもとの地に戻している。戦後の社殿建立工事の時、地下

1.8 ㍍のところから、礎石らしいものがみつかり祭器のかけらが出てきたという。

●「日暮通（ひぐれどおり）」の由来

鎌倉中期の天台座主・澄覚法親王が布引の滝を訪れて詠んだ「布引の滝見て今日の日は暮れぬ 一夜宿かせ峯の笹竹」の歌にちなんで付けられたという。また、旧生田村の字名に「ひぐら」があり、それに漢字をあてたとも言われている。

●「八雲通（やぐもどおり）」の由来

日暮通にある中村八幡の「八」と北の東雲通の「雲」をあわせて付けられた町名といわれるが、はっきりしたことはわからない。

●「東雲通（しのめどおり）」の由来

一説には、平安時代の貴族・藤原家隆の「みつか夜のまだ臥し慣れぬ芦の屋の つまもあらはに明る東雲」からとったといわれるが、定かではない。

●「旭通（あさひどおり）」の由来

鎌倉中期の貴族。西園寺実氏の「呉竹の夜の間の雨に洗ひほして 朝日に晒す布引の滝」からとったものだと言ったり、東隣の日暮通に対応して付けたものだと言ったりする。

●「雲井通（くもいどおり）」の由来

平安時代の藤原隆家の詠んだ「雲井よりつらぬき懸る白玉を 誰れ布引の滝といひけむ」の歌や、『栄華物語』滝の巻の皇太后宮太夫祐家の「めづらしや雲井遥に見ゆるかな よに流れたる布引の滝」と詠んだ歌にちなんで付けられたという。